

<研究ノート>

ボランティア活動と市民協働

飯島 泰裕

青山学院大学 シビックエンゲージメントセンター、社会情報学部

A Survey on Volunteer Activities and Civic Engagement

IIJIMA Yasuhiro

Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University /
School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University

要旨

2022年度より、青山スタンダード科目にて「ボランティア・市民協働論」を開講するにあたり、本研究ノートでは、まず「ボランティア活動と市民協働」という講義に必要な情報を収集し整理する。具体的には、主体性、公益性、創造性が重視されるボランティアという概念の生い立ちと、日本での歴史を概観する。

さらに、ボランティアを①地域社会のボランティア、②環境ボランティア、③災害ボランティア、④国際ボランティアの分野に分類し、それぞれにつき説明する。また、ボランティアと類似する市民協働についても説明する。

また事例として、①障がい者の自立支援である金沢 Outsider Art Project やシブヤフォント、地域活性化として取り組み始めた、森ラボや地産ガチャについて報告する。

キーワード：市民協働、ボランティア活動、障がい者の自立支援、地域活性化

Abstract

For the 2022 Aoyama standard course "Volunteering and Civic Engagement", we collected and organized the information necessary for the lecture "Volunteer Activities and Civic Engagement". Specifically, We describe an overview of the origin of the concept of volunteerism, which emphasizes independence, public benefit, and creativity, and its history in Japan.

Furthermore, volunteers are classified into (1) community volunteers, (2) environmental volunteers, (3) disaster volunteers, and (4) international volunteers, and each of these is explained. It also explains civic engagement, which is similar to volunteering.

In addition, as examples, we report on (1) "the Kanazawa Outsider Art Project" and "Shibuya Font", which support the independence of people with disabilities, and (2) "Mori Lab" and "Chisan-gacha", which have begun to work on regional revitalization.

Keywords: civic cooperation, volunteer activities, independence support for people with disabilities, regional revitalization

1 はじめに

本稿は、2022年度より、青山スタンダード科目にて「ボランティア・市民協働論」の開講にあたって、「ボランティア活動と市民協働」という講義に必要な情報を収集し整理したものである。そして、関連するシビックエンゲージメントセンターのいくつかの活動を紹介する。

2 ボランティア

ボランティアとは何か？日常会話では、無償でやることを意味することが多い。しかし、有償のボランティアと呼ばれる活動もあり、何なのか？と問われると悩むものである。ここで、ボランティアについて定義し、日本での歴史や様々なボランティアを整理しておく。

(1) ボランティアの定義

中央社会福祉審議会の意見具申（1993：193-202）^[1]において、ボランティアとは「自発的な意思に基づき他人や社会に貢献すること」と定義され、その特徴として、①自発性 ②無給性 ③公益性 ④創造性が挙げられている。また、東京ボランティア・市民活動センター（2021）^[2]は、ボランティア活動の4原則として、①自主性・主体性 ②社会性・連帯性、③創造性・開拓性・先駆性、④無償性・無給性をあげている。

他にもいくつかの定義があるが、総じて考えると、柴田ら（2010）^[3]の定義である、「①自ら進んで、（自発性、主体性） ②お金のためではなく、相手や世の中のために（無償性、非営利性、公益性、社会性） ③国や地方自治体がまだ取り組んでいないことに挑戦（先駆性、創造性、開拓性）すること」と定義するのが望ましい。

また、柴田ら（2010）^[3]は次のようにも述べている。Volunteerという言葉は、ラテン語の Volo（英語の will）に人名称 er をつけた言葉で、自ら進んでやることを意味しており、ラテン語の Voluntarius（切に求める）にも関連している。つまり、語源を追っていくと、個人の強い意志を持った活動のことになる。戦争のあった時代では、「減私奉公」や「勤労奉仕」といった場面も多々あったが、ボランティアは、主体性を持って取り組むことであり、「私を亡くして公に使える」ことではない。

さらに、ボランティアに通じる言葉として、以下の3つも挙げられる。論語において「己の欲せざる所、人に施すなかれ」とも語られ、自分のしてほしくないことを、人にしてはいけなさと語られている。仏教用語に「慈悲」という言葉があるが、「悲」とは、サンスクリット語で「カルナー」（うめきや哀れみ）であり、そこに「慈」（サンスクリット語「マイトリー」（友情、友愛）を寄せることを意味する。つまり、「自己のうめきを知るものは他人の苦悩にも共感でき、苦悩するものに対して同情を持ち、親近感・友情を持つこと」とされている。さらに、陽明学では「他人の苦しみを放っておくことは、人に忍びざる心」とも言われている。

このような柴田らの説明に加え、「互酬」ということも補足しておきたい。ボランティアは、無償性や非営利性から、利他主義として「ボランティアされる人のため」と捉えられることが多いが、それだけのためではない。なぜなら、ボランティアをした人からは、「ボランティア活動を通じて仲間ができた」「活動が楽しく、地域とのつながりができた」「新しい知識や技術を習得できた」「社会に対する見方が広がった」「役に立ったという実感や生き甲斐になった」などの感想を得ることが多いからである。つまり、「自分の成長があった」「結果的に、私のための活動であった」という反応が多いのもボランティアの特徴であり、これは「互酬」と呼ばれている。

(2) 日本のボランティア活動の歴史

『ボランティア・NPO 用語辞典』（2004）^[6]は、日本のボランティア活動の歴史を、大きく5期に分けている。第1期は、1945年から1959年であり、戦後復興期である。そこでは、日本赤十字奉仕団をはじめ、大阪社会事業ボランティア協会、ボーイスカウトなどが発足した。第2期は、1960年から1969年であり、高度経済成長期である。ここでは、善意銀行、日本青年奉仕協会が発足し、点字や手話を普及させ、障がいのある方の施設などを訪問するようになった。第3期は、1970年から1979年で、社会運動指向の時期であり、交通遺児募金や命の電話などが出てきた。第4期は、1980年代で、住民参加が唱えられ、在宅福祉サービスや有償ボランティアが生まれてきた。第5期が1995年以降であり、阪神淡路大震災が起こり、大きな災害によって、コーディネータが登場した時期でもある。つまり、①ボランティアの

アサイン ②全国の連携 ③企業との連携などを図る人の存在が必要となってきた。

近年、日本の企業では、「CSR：Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任」が重要視されるようになり、企業評価の場面でも、非財務評価項目として取り扱われることが多くなってきている。ただ、柴田ら（2010）^[3]によると、その始まりは、1985年のプラザ合意以降、日本企業が米国進出にする際に、CSRの重視を求められたことであった。そして、1990年の経団連の1%クラブ、サステナビリティ（持続可能性）、地球環境保全、フィランソロピーとして、企業もその価値を認識するようになってきた。

(3) ボランティアの分野

一般にボランティアというと、災害後に組織されるボランティアのことを指すことが多く、地震や台風、洪水などの自然災害が起きると、すぐに組織され動き出すことが多い。ただ、それだけでなく様々なボランティアがあり、ボランティア全体を大別すると、①地域社会のボランティア ②環境ボランティア ③災害ボランティア ④国際ボランティアに分けられる。^{[3][4][5]}

(3-1) 地域社会のボランティア

地域社会には児童、障害者、高齢者など社会的弱者がおり、彼らを支える地域社会のボランティアは地域福祉と呼ばれることも多い。その担い手は、町内会、自治会、公民館などであり、それらは地域福祉の他、地域の教育や学習や自然環境保護、文化伝承なども行っている。

ちなみに、岩手県観光協会^[7]によると、日本初の公民館は、1941年に当時の讀賣新聞社長だった正力松太郎から、政治家の後藤慎平^[1]に感謝して、岩手県旧水沢町に寄付された「後藤伯記念公民館」であった。正力は讀賣新聞社の再建に乗り出すが、資金不足を後藤が自宅を抵当に調達して貸してくれた。正力は、事業が成功して借金を返そうとしたが、後藤が既に他界していたため、後藤の故郷である旧水沢町に借りた額の約2倍を寄付したとも言われている。

金沢には、「加賀鳶梯子登り」という伝統行事がある。金沢市消防団^[8]によると、加賀鳶は、1718年に、八代将軍吉宗が一万石以上の藩に対し、江戸藩邸を守る大名火消を設置するよう命じたのを受けて、加賀藩では江戸上屋敷の防備のため設置されていた自衛消防隊を増強した。これが加賀鳶の始まりとされている。明治に入り、江戸藩邸にいた加賀鳶38人が金沢に移り住み、現在の形となった。現在では、金沢市第一、第二、第三消防団の49分団のうち、48分団が梯子登りを実施しており、1978年には「加賀とびはしご登り保存会」を設立し、伝承をしている。

梯子登りの目的は江戸時代、火消しが火災現場で高い梯子を立て、頂上から火事の状況や風向き、建物の状況を確認、高所での作業を行うための訓練や、勇気を示すためとも言われている。2009年12月に加賀鳶梯子登りは石川県無形民俗文化財に指定され、出初式・百万石まつりなどの主要行事に出演している。また、その後継者の育成のため、金沢市の全消防団員は生業の傍ら、消防団活動および保存会活動を行っており、2002年から「金沢子どもはしご登り教室」を開講し、梯子登りの妙技を子ども達へ伝承する活動も行っている。つまり、消防団という地域組織が文化伝承を担っており、これらもボランティア活動と言える。

(3-2) 環境ボランティア

環境問題や環境保護運動も、多くの人が取り組むボランティア活動の一つである。その起源は、John Muirにある。彼は、ウィキペディア「ジョン・ミューア」^[9]によると、自然保護の父、国立公園の父と呼ばれており、ヨセミテの大自然に魅了され、自然の驚異と人間の営みについての原稿や著作を発表した。その中で、シエラネバダ山脈の地形が氷河作用に深く関わっていることを突き止める。一方で、1848年から1855年までのゴールドラッシュの頃で、西部開拓の人口が急増し、豊かな森に豊富な水をたたえたヨセミテの地で森林伐採やダム建設が計画されたが、これに彼は異議を唱えた。

1890年、ヨセミテ公園は州立公園だったが、彼は国立公園への格上げの運動を始めた。森林業の団体は反対していたが、議会に対して格上げのロビー活動が成功し、ヨセミテとセコイアは国立公園として指定される。

また、Carson, R.L. は、ウィキペディア「レイチェル・カーソン」^[10]によると、蚊の駆除に使われていたDDTにより鳥の異状死が増えていることを指摘し、ケネディ大統領に対して科学技術諮問委員会に農薬委員会の設置を嘆願した。1962年に発表した著書『沈黙の春』（Silent Spring）は、農薬として

使う化学物質の危険性を取り上げており、アメリカにおいて半年間で50万部も売り上げ、後のアースデイや1972年の国連人間環境会議のきっかけとなり、環境問題そのものに人々の目を向けさせ、環境保護運動の始まりとなった。

(3-3) 災害ボランティア

災害ボランティアとは、ウィキペディア「災害ボランティア」^[11]によると、主として地震や水害、火山噴火などの自然災害発生時および発生後に、被災地において復旧活動や復興活動を行うボランティアのことである。日本における災害ボランティアとして、古くは1923年9月1日の関東大震災において、当時の東京帝国大学の学生が、上野公園などで被災者の救援にあたった記録がある。また1948年6月28日の福井地震では、東京学生同盟や、京都府、島根県の青年団が駆けつけ、地震で破壊された堤防を修復し、被災者への食料配給などを行ったほか、YMCAが授乳所を運営、永平寺の雲水（修行僧）が、青空学級を開講した等の記録がある。

1990年から1995年にかけての雲仙噴火災害に災害ボランティアが活躍したほか、1993年7月の北海道南西沖地震において、救援物資の搬入、仕分けなどに延べ9,000人のボランティアが活躍した。1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、延べ137万7,300人のボランティアが全国から駆けつけ、「ボランティア元年」と言う言葉を生み、同年7月には政府の「防災基本計画」が改訂され、「防災ボランティア活動の環境整備」「ボランティアの受入れ」に関する項目が設けられた。また、毎年1月17日を「防災とボランティアの日」、1月15日から21日を「防災とボランティア週間」とした。さらに1995年12月の災害対策基本法の改正により、「ボランティア」と言う言葉が我が国の法律に初めて明記された。

(3-4) 国際ボランティア

国際ボランティアとは、柴田ら（2010）^[3]や名古屋商科大学コラム^[12]によると、世界中に出かけていき、各国から集まる仲間と国際交流しながら、活動を通じて社会や人々に貢献することである。地球市民という考え方から、自らの考えで動き、仲間ととことん話し分かり合い、困難な状況も楽しみながら、自分と仲間の力でやり遂げる。これは、観光旅行や普段の日常生活では得ることのない特別な体験となる。そして、難民、貧困、人権、衛生、水不足、環境悪化などの国際的な問題に対峙し、困難な状況にある人々を支援することになる。国際協力機構（JICA）による青年海外協力隊や、日系社会青年ボランティアなどもある。

国際ボランティアの担い手の組織としては、NGO（Non-Governmental Organization：非政府組織）が挙げられる。NGOでは、世界平和や貧困撲滅、人権擁護、環境問題などの分野で、国際的な協力や支援のボランティア活動を行っている。代表的なNGOを表1に挙げる。

表1：欧米や日本の代表的な NGO

名称	設立した国や本部	設立の年	現在の主な活動分野
赤十字社	スイス	1863 年	緊急援助、開発援助、人道支援
国境なき医師団 (MSF)	フランス	1971 年	緊急医療支援
アムダ (AMDA)	日本	1984 年	緊急医療支援
アムネスティ・インターナショナル	イギリス	1961 年	人権擁護
世界自然保護基金 (WWF)	スイス	1961 年	野生動物・天然資源の保護、環境保全
グリーン・ピース	オランダ	1971 年	核問題や有害物質問題、森林・海洋生態系保護、地球温暖化問題など

（出典：柴田ら（2010）より作表）

(4) 市民協働

ボランティアと似ている活動として、市民協働がある。川崎市のホームページ^[13]によると、「「協働」とは、市民と市とが、暮らしやすい地域社会のための目的や解決すべき課題を共有して、それぞれの役割と責任のもとで、お互いを尊重し、対等な関係に立ちながら、市政に協力していくこと」とある。相模原市、佐倉市、福井市などでもほぼ同様に定義している^{[14][15][16]}。

平凡社世界大百科事典（1998）^[17]や宮原（2002：5-12）^[18]によると、「市民」の概念の起源は古代ギリシャにあり、ポリス（都市国家）を共同で防衛する者を意味している。これは、市民の義務であり、誇りと名誉の源泉でもあった。そして「市民」としてポリスの政治活動（民主主義）に直接参加できることが、ポリスの構成員であることを示し、「自由」と呼ばれていた⁽²⁾。

つまり、市民協働とは、その地域社会の構成員であるという誇りを持って、地域社会のために、課題を解決すべく、行政と対等に、解決策を見出していくことである。このことは、そのまちや地域社会に誇りを持つ、シビックプライドにも繋がっていく。

3 障害者の自立支援

内閣府（2018）^[19]によると、日本には、約 503 万人の身体障がい者・知的障がい者がおり、その内、約 485 万人が在宅（身体障がい者、約 419 万人（うち在宅、約 412 万人）、知的障がい者、約 84 万人（うち在宅、約 73 万人））で暮らしている。これらの方への直接的な支援としての福祉ボランティアがあるが、それだけでは済まされない。協和麒麟株式会社 MIRAI PORT^[20]によると、医療の進歩によって重度の障がいがあっても長く生きられる命が増えた一方で、介護者である親や家族が老いた時、あるいは亡くなった時の彼らの生活が問題となり、障がい者の親の大きな心配ごとの一つとなっている。実際、親が他界すると、障がい者施設へ入居せざるを得ない事例が多い。

しかし、障がい者の中には、山下清^{(3)[21][22][23]}のように優れた芸術的才能を持つ人も少なくなく、芸術的作品の収入により自立できる人もいる。こうした社会参加をスムーズにするのが、障がい者の自立支援である。

(1) 金沢 Outsider Art Project

金沢市では、そのホームページ^[24]によると、優れた芸術的才能を持つ障害のある方が、創作活動を通じて収入を得て、自立できる仕組みを構築するため、金沢アート工房と、世界的に著名なアニメーションスタジオ「トンコハウス・ジャパン」と連携し、著作権管理を主軸とした金沢版ビジネスモデル構築事業「OUTSIDER ART PROJECT」を 2020 年に開始した。そして、その第 1 弾としてアウトサイダー・アート作品を絵柄としたコースターを制作し、2020 年にオープンしたハイアット・セントリック金沢併設店舗である FOODCLUB にコースターを提供し、作品使用料のロイヤリティを分配する試行実験を実施した。また、市役所第 2 本庁舎で、このコースターの原画を含む、「金沢発信アウトサイダーアート vol.12 Selected works」作品展を開催した。

本学でも、2021 年 12 月および 2022 年 12 月の障がいウィーク企画展で原画の展示を行った。また、図 1 のように、IVYCS を通じてコースターや絵葉書の販売を行った。



図1：本学購買会にて金沢 OUTSIDER ART PROJECT コースター販売の様子
(出典：シビックエンゲージメントセンター HP <https://www.aoyama.ac.jp/life/volunteer/about.html> より)

(2) シブヤフォント

シブヤフォント^[25]は、2016年度渋谷みやげ開発プロジェクトとして、渋谷区内の障がい者支援事業所と桑沢デザイン研究所の学生の協力により生まれた。渋谷で暮らす障がいのある人と、渋谷で学ぶ学生が共に創り上げた文字や絵柄をフォントやパターンとしてデザインしたデータを使って、様々なモノやコトを作り出す。これにより、より多くの人に渋谷を好きになり、シティプライドを感じ、障がいのある人の活動を知って欲しい。未来像として「ちがいをちからに変える街」を掲げ、色々な人が集まり (Diversity)、取り込む (Inclusion) 渋谷だからこそ出来ることであろう。

本学では、図2のように、こちらも2021年12月および2022年12月の障がいウィーク企画展で展示を行った。また、IVYCSを通じて絵葉書の販売を行った。



図2：2022年12月障がいウィーク企画展の様子
(出典：シビックエンゲージメントセンター Twitter https://twitter.com/agu_volunteer/status/1602896851510104065?s=61&t=UHMVQ2rUkvK7jubhv8y7BA より)

4 地域活性化

前述のシブヤフォントは、障がい者の自立支援を意図したものだが、それだけでなく渋谷という街のシビックプライドの醸成や地域活性化につながっている。これは、狭義のボランティアではないが、市民協働という、誇りを持って社会に貢献する活動には、こうした地域活性化の活動も含まれる。また、市民協働には、誇りを持って社会に貢献する活動だが収入も得るソーシャルビジネスも含まれる。相模原市で行われている二つの活動について、紹介する。

(1) 森のイノベーションラボ FUJINO「森ラボ」

旧藤野町は、相模原市と合併後、相模原市緑区の一角となり、藤野地区と呼ばれている。相模原市においては、北西部に位置し、JR 中央本線、中央自動車道が通り、都心から約 1 時間の距離にありながら、四方を山々に囲まれ豊かな河川が貫流する森と水と湖のまちである。この藤野地区の、JR 中央本線 藤野駅徒歩 3 分と大変アクセスの良い場所で、多様な働き方を支えるテレワーク拠点、人と仕事を繋ぐ交流拠点として、森ラボ^[26]は運営を開始した。働く場として、コワーキングスペースの提供はもちろん、「SDGs with ART」をコンセプトとし、個性豊かな地域と繋がるハブとなり、イノベーションを生み出すことを目指している。この施設やプロジェクトは、相模原市内外を問わず、利用が可能である。相模原市の実証運営期間を経て、2022 年 4 月より、アーキタイプ・藤野エリアマネジメント企業連合が民間で運営を行なっている。

イノベーションを起こすプロジェクトとしては、農産物商品開発プロジェクトや、森の再生プロジェクト、バーチャル実験室など約 10 プロジェクトがある。本学としては、バーチャル実験室や藤野駅前活性化プロジェクトなどに協力している。



図 3：森ラボ コワーキングスペース
(出典：森のイノベーションラボ FUJINO「森ラボ」HP
<https://morilab-fujino.jp/>)

(2) 地産ガチャ

最近、カプセルトイ自動販売機（通称：ガチャガチャ）が人気となっている。昨今では、従来の子供のおもちゃというイメージは変わり、様々な年齢層に向けた商品が展開されている。通常は、ガシャポンなどの企画会社が、海外で大量生産されたおもちゃを入れたものを販売している。しかし、地産品を手作り、手詰めにてガチャガチャ化するプロジェクトがあっても良いのではないかということで、「地産ガチャ」^[27]が立ち上がった。これは、相模原市藤野地区を中心にローカルな情報を発信するメディア的な役割を持つガチャガチャでもある。このビジネスは、現代ビジネスの常識とも言える、電子決済、ネット通販、グローバル展開などとは全て逆張りだからこそ、何かが起こりそうだと言われている。

本学でも、図4のように、相模原キャンパスの購買会に2021年7月より設置、販売している^[28]。設置後、1週間経たずにいくつかのものが完売することとなり、学生の反応に驚いたと同時に、直ぐ話題になるその情報発信力の強さに感銘した。



図4：本学相模原キャンパス購買会に設置の地産ガチャ
(出典：青山学院大学「シビックエンゲージメントセンター概要」
HP <https://www.aoyama.ac.jp/life/volunteer/about.html> より)

まとめ

本研究ノートでは、「ボランティア・市民協働論」の科目開設にあたって、「ボランティア活動と市民協働」という講義に必要な情報を収集し整理した。また、それに関連する昨今のいくつかのCECの活動を報告した。まず、ボランティアの定義と関連する概念を整理して、主体性、公益性、創造性を重視することや、利他主義、慈悲、互酬などの概念に触れて述べた。そして、日本での歴史を述べ、①地域社会のボランティア ②環境ボランティア ③災害ボランティア ④国際ボランティアの分野を示した。地域社会のボランティアとしては、福祉がよく語られるが、公民館の起こりや文化伝承をしている消防団について述べた。環境ボランティアの起こりは、ヨセミテ国立公園の設立や農業問題にあることを述べた。災害ボランティアは参加者の多い活動だが、その起こりは、関東大震災における学生の活動にあることも述べた。国際ボランティアは、世界各国から集まる仲間と国際交流の中から問題解決していく活動で、一国では収まらない難民、人権、環境悪化などの問題に立ち向かっていくものである。また、地域社会の構成員である誇りを持って、課題解決策を出していく市民協働について述べた。

さらに、障がい者の自立支援としてシビックエンゲージメントセンターが取り組んでいる、金沢 Outsider Art Project やシブヤフォントについて述べた。そして、地域活性化事業として取り組み始めた、森ラボや地産ガチャについて述べた。

本研究ノートの執筆を通じて、ボランティアの歴史は古く、関連する人々の多さや多様さに改めて感心し、意味深いものと感じた。ボランティアから市民協働まで、その精神は一緒でも、活動する内容は多様なものとなり、規模も大きく広がっていく。今後のシビックエンゲージメントセンターの発展にも繋がり、その活動もさらに広がっていくものと考ええる。

註

- (1) 後藤 新平（ごとう しんぺい:1857年より1929年）は、日本の医師、官僚・政治家であり、台湾総督府民政長官、南満洲鉄道初代総裁、通信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市第7代市長、ボーイスカウト日本連盟初代総長、東京放送局（のちの日本放送協会）初代総裁、拓殖大学第3代学長などを歴任した。
- (2) その一方で、女性や奴隷は、生きるために必要な労働に拘束され、公的なものに参加できず、不自由とされた。
- (3) 山下清（やました きよし:1922年より1971年）は、ちぎり紙細工の貼り絵やペン点描画で有名な日本の画家。1922年3月10日に生まれるが、3歳の頃に風邪から重い消化不良で命の危険に陥り、一命こそ取り留めたものの、軽い言語障害、知的障害の後遺症を患う。1934年に知的障害児施設「八幡学園」に入園する。ここで「ちぎり紙細工」に出会い、没頭し才能が磨かれる。「日本のゴッホ」とも言われ、1940年から1955年までの間、放浪の旅を繰り返し『放浪日記』にまとめられ、映画化などされている。戦後は「裸の大將」とも呼ばれ、全国巡回展が約130回開かれ、観客は500万人を超えた。1971年7月12日、脳出血のため、わずか49歳で死去した。代表作に『長岡の花火』があるが、行った先々の風景を、多くの貼り絵に残している。特に花火が好きだったため、全国に足を運び、その時の感動した情景をそのまま作品に仕上げている。清は驚異的な映像記憶力の持ち主で、旅先ではほとんど絵を描くことがなく、八幡学園や実家に帰ってから記憶を基に描いていた。^{[21][22][23]}

参考文献

- [1] 中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会意見具申『ボランティア活動の中長期の振興方策について』1993
- [2] 東京ボランティア・市民活動センター「「ボランティアってどんなもの？」を知るための、ボランティアの4原則」<https://www.tokyo-vln.jp/learn/firststep/51664>, 2021（2023年2月13日アクセス）
- [3] 柴田 謙治, 原田 正樹, 名賀 亨 編『ボランティア論ー「広がり」から「深まり」へ』みらい, 2010
- 池田 幸也『ボランティア論ー市民社会の創造ー』大学図書出版, 2018年
- [4] 猪瀬 浩平（著）ボランティアってなんだっけ?』岩波書店, 2020年
- [5] 岡本栄一『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会出版部, 2006年
- [6] 社会福祉法人 大阪ボランティア協会編『ボランティア・NPO用語事典』中央法規出版, 2004
- [7] 岩手県観光協会「後藤伯記念公民館」https://iwatetabi.jp/spot/detail.spn.php?spot_id=194（2023年2月13日アクセス）
- [8] 金沢市消防団「加賀 鷹」<https://fire.city.kanazawa.ishikawa.jp/syouboudan/4kagatobi/4rekisi-1.html>（2023年2月13日アクセス）
- [9] ウィキペディア「ジョン・ミューア」<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジョン・ミューア>（2023年2月13日アクセス）
- [10] ウィキペディア「レイチェル・カーソン」<https://ja.wikipedia.org/wiki/レイチェル・カーソン>（2023年2月13日アクセス）
- [11] ウィキペディア「災害ボランティア」<https://ja.wikipedia.org/wiki/災害ボランティア>（2023年2月13日アクセス）
- [12] 名古屋商科大学コラム「国際ボランティアとは？」<https://www.nucba.ac.jp/column/entry-14192.html>（2023年2月13日アクセス）
- [13] 川崎市「市民協働とは何ですか？」<https://www.city.kawasaki.jp/templates/faq/250/0000124368.html>（2023年2月13日アクセス）
- [14] 相模原市「相模原市市民協働推進条例」https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/shisei/shisei_sanka/partnership/1004935.html, 2012（2023年2月13日アクセス）
- [15] 佐倉市「市民協働とは」<https://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/jichijinkensuishinka/186/5154.html>（2023年2月13日アクセス）
- [16] 福井市「市民協働とは」<https://www.city.fukui.lg.jp/kurasi/mati/collabo/siminkyoudoutoha.html>, 2016（2023年2月13日アクセス）
- [17] 株式会社平凡社「市民」『世界大百科事典 第2版』, 1998
- [18] 宮原辰夫「「市民」の歴史と近代の「市民社会」ー歴史から学ぶ現代の市民像ー」『文教大学湘南総合研究所紀要』, 6, 5-12, 2002
- [19] 内閣府『平成30年度 障害者白書』, 2018
- [20] 協和キリン株式会社 MIRAI PORT「親亡き後の障害者、地域でどう暮らすか」<https://www.mirai-port.com/peace/1365/>（2023年2月13日アクセス）
- [21] ウィキペディア「山下清」<https://ja.wikipedia.org/wiki/山下清>（2023年2月14日アクセス）
- [22] 山下清作品管理事務所「山下清 公式サイト」<http://www.yamashita-kiyoshi.gr.jp/contact.html>（2023年2月15日アクセス）
- [23] thisis 株式会社「山下清とは？日本のゴッホと呼ばれた画家の人生や代表作品を解説！」<https://media.thisisgallery.com/20222896>（2023年2月15日アクセス）
- [24] 金沢市「OUTSIDER ART PROJECT 始動!!」<https://www.facebook.com/CityofKanazawa/posts/3001985686596079/>（2023年2月14日アクセス）
- [25] 一般社団法人シブヤフォント「シブヤフォント」<https://www.shibuyafont.jp/>（2023年2月14日アクセス）
- [26] 森のイノベーションラボ FUJINO「森ラボ」<https://morilab-fujino.jp/>（2023年2月14日アクセス）
- [27] 「地産ガチャ」<https://www.chisangacha.com/>（2023年2月14日アクセス）

- [28] 青学新聞「青学 相模原キャンパス購買部 ガチャガチャで地域活性化へ」[https://agunewspaper.com/2021/07/15/ ガチャガチャで地域活性化へ/](https://agunewspaper.com/2021/07/15/ガチャガチャで地域活性化へ/)（2023年2月15日アクセス）
- [29] 青山学院大学「シビックエンゲージメントセンター概要」<https://www.aoyama.ac.jp/life/volunteer/about.html>（2023年2月15日アクセス）